

キャンパス通信 ippeki



01 特集／ 世界を舞台に 活躍する卒業生

授業紹介

- 03 1年生／2年生
- 04 3年生／海外研修
- 05 4年生／大学院
- 06 卒業生・修了生紹介
- 07 キャンパス日記
- 08 トリアージの流れ～オープンキャンパスより～
- 09 国際活動／看護部長からのメッセージ
- 10 決算報告／研究室訪問

「オープンキャンパス(1回目)においてトリアージ訓練を実施」

トリアージとは大災害や事故現場などで一時に大勢の負傷者が発生した時に、重症度によって治療の順番を決めることを言います。赤十字の使命である国内外における災害救護をはじめ、苦しむ人を救うための幅広い活動を行うことを念頭に、本学が災害時において傷病者の搬送・受入をいかにスムーズに行うかを主眼に訓練を実施しました。オープンキャンパス時だけでなく、今後も訓練を継続的に行うことで、赤十字の看護大学として災害対応力の強化を図っていきます。(詳細は本誌 P08 参照)

第9号
2015.4 ▶ 2015.9



ひとりを看る目、その目を世界へ

 日本赤十字九州国際看護大学
Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School



世界を舞台に活躍する卒業生

橋爪 亜希 (学部2期生) 独立行政法人国際協力機構 人間開発部 保健第二グループ 保健第四チーム ジュニア専門員

海外で働く看護師・助産師を目指したきっかけ

海外で働く看護師を目指したきっかけは、ただ単にかっこいいという憧れです。テレビが大好きだった私は、様々なテレビ番組の中でも医療系のドキュメンタリーやドラマが好きでした。私が知らない外国語や医療用語を操り、自分とは全く違う環境で生活している人々の命に携わる仕事をしている姿がかっこいいと思います。高校や大学で途上国の現状について調べていくうちに母子保健の知識を持つことが必要だということが分かり、そこで活躍しているのは助産師が多いという事を知り、助産師を目指してみようと思いはじめました。

日本赤十字九州国際看護大学でのキャンパスライフ

海外で働くかっこいい看護師という夢を現実のものにするために選んだのが、本学でした。世界中にネットワークがある赤十字で、国際という名が入っており、しかも助産コースもある看護大学なので(※)自分の夢を叶えるすべての要素が入っておりここだと思えました。大学に入学してからは、国際のことばかりを考えている暇はなく、目の前の膨大な課題や実習、国家試験勉強をこなすことに必死になる日々でした。正直に言うと、もうあの忙しい大学生時代には戻りたくありません。しかし、本学に入学して、本当に良かったと感じることは同じ夢を語り合える友人たちや世界中で活躍している恩師たちと出会えたことです。国際保健・看護IIの海外研修で訪れたミャンマーではその国の人々の生活を見て、「支援」って何だろう、本当に必要なものなのだろうかと毎日友人たちと語り合いました。研修の後も、ミャンマーで見た事、考えた事は忘れられないものとなり、今でもミャンマーという国には何らかの形で関わり続けています。日々、目の前のことに精一杯になっっているながらも、国際の道を進み続けることが出来たのは、そのような友人たちや恩師のお

かげだと思えます。卒業して10年経つ今でも、その友人や恩師たちとの関係は続いており、お互いに刺激し合いながら、それぞれの道を進んでいます。

卒業してから現在までの歩み

大学を卒業してから、3年間は武蔵野赤十字病院で助産師として勤務しました。大学の学びを通して、海外でどのような働き方をするにしても、まずは知識と経験が必要だと分かり、日本の病院で臨床経験を積む事になりました。

武蔵野赤十字病院を選んだ一つの大きな理由は、妊娠期、分娩期、新生児期のケアおよび育児支援、加えて婦人科疾患のケアについて助産師として幅広い経験が出来る点でした。もちろん、ひとつひとつの領域を深くしっかり学ぶことも大切だと思います。しかし、私は3年を中途に退職し、海外に行く事を考えていましたので、短い期間で出来るだけ幅広い知識を身につけたいと考えていました。

臨床2年目に入って、具体的にどのような道



2004年 国際看護学II研修でユニセフ施設を訪問

(※)現在は本学大学院看護学研究科看護学専攻(助産コース)にて助産師養成教育を実施

を経て海外に行くか考え始めました。海外青年協力隊や国境なき医師団などで途上国に行く事も考えていましたが、臨床で働く事に楽しさも感じていました。また、語学力も不十分であると感じていたので、アメリカの看護師免許を取るための勉強をし、英語を使ってアメリカで働いてみるのも楽しいかもしれないと思い始めました。そこで、私は、看護師免許を取得する事を前提とし、アメリカへ語学留学をするところから始める事にしました。しかし、国際協力の分野で活躍している方々の本を読んだり話しを聞いたりする中で、公衆衛生学修士号(Master of Public Health: MPH)を持つている方が多くいることが分かりました。臨床での助産師経験に加えMPHがあることは、自分の将来の活動の幅を広げる事になると思い、語学留学中に大学院進学へと方向転換をする事になりました。また、MPHをアメリカという様々な国の人々が集まる国で英語を使って学ぶ事は、海外で働く上では有利になると考え、オレゴン州立大学(Oregon State University: OSU)の国際保健修士課程を選びました。

OSU在学中には、アフリカの馬拉ウイの県病院でインターシップをしました。各団体や政



インドネシア、パンダアチエの看護学校を訪問

府が行っている支援プログラムが現場レベルでどのように運営されているのかを知るために、地域住民の疾病予防や保健衛生活動を行うヘルスワーカーと共に村やヘルスセンターへ出向き活動しました。現場で働いている現地の人々は何か問題で何が必要なのかは分かっていますが、財政難・保健システムや基礎インフラの未整備・文化の違いなどで思い通りの活動が出来ないという現実がありました。これらの問題を、どのように捉え、解決に導くのかを大学院時代は議論していました。OSUでの学生生活は、思った以上に大変で、母国語ではない言葉で専門的な内容について議論したり、プレゼンテーションをしたりするのは最後まで苦手なままでした。家族や友人・教授たちの支えのおかげで、なんと卒業し、MPHを取得する事ができた時は、本当にうれしかったです。

OSUを卒業した後は、国際保健の現場に出るためにいろいろな進路を考えていました。そんな時にかつての恩師からの誘いもあり、本学に戻り成育看護学の助手として勤務することになりました。国際保健に関して、現場にどっぷりと浸かってという形ではありませんが、研究や国際協力機構(JICA)と大学の



馬拉ウイ、村のヘルスセンターを訪問

プロジェクトの一環としてインドネシアやミャンマーを訪れる機会もありました。また、何よりも海外に行く事を目指している学生と共に国際保健について語り合う時間はとても楽しく、教員と学生という立場ではなく、将来一緒に働く仲間として話をしている感覚でした。学生からの刺激もあり、やはりもう少し国際保健の現場での経験を積みたいと思い、現職であるJICAのジュニア専門員の職に就きました。

ジュニア専門員とは、国際協力に関する実践的な計画策定、運営管理といった協力手法等についての能力の向上を図るために、JICA本部での国内研修を約1年半行い、その後長期の専門家として海外で働く制度です。現在、私はミャンマーとバングラデシュの保健関係のプロジェクトを担当しています。プロジェクトのマネジメントには保健に関する知識だけではなく、政治や経済・文化についての知識が必要なる事を実感する日々です。特にミャンマーは軍事政権から民主化した事で国がめまぐるしく変化しています。私が最初に訪れた10年前とはかなり状況が異なってきました。まだまだ、分からない事がたくさんありますが、そのような世界の動きを身近に感じながら、そして世界中で活躍している方々と共に働いていることにワクワクしています。自分がいざれとこかの国に派遣され、専門家として働く事を念頭に置き、ネットワークを築きながらマネジメントやコーディネーションに必要な知識や能力について実践を通して学んでいます。

学生の皆さんへ

「支援」とは何なのか、未だに自分なりの考えを持っていないというのが正直なところです。しかし、今でも海外で働きたいという思いは変わっていません。私が憧れを抱いていたような途上国の医療施設で直接的な「支援」をするだけが「支援」でないことは確かです。どのような形で「途上国」の「支援」に携わるかは今でも模索中です。そんな中、いつも私が心がけている事は、「自分が行ったことを常に形に残



アメリカ、大学院の口頭卒業試験でのプレゼンテーション

すこと」「ネットワークを広げること」「自分の目標を人に話すこと」です。留学して修士号をとるなど自分が経験した事は、形に残すようにしています。それらの事は、自分が努力した証として他の人に説明する時に役に立ちます。そして、ネットワークを広げるためにいろいろな場所に出向き、いろいろな人に出会っています。これまでも、これらの人々との出会いから得られた情報は、私の進路に大きな影響を与えています。さらに、自分の目標を公言する事で、それを達成しなければならぬという自分自身へのプレッシャーにもなりますし、私の目標を知ってくれている人から思いがけない情報が入ってくることも多々あります。私は、これからも、これらの事を実践しながら、世界のどこかで働き続けたいと思っています。そして、本学の卒業生とどこかの国で共に働く日が来る事を楽しみにしています。

授 業 紹 介

Class Introduction



Class Introduction

必須科目「基礎力総合ゼミナール」

～高校と大学の学習方法の違い～

1
年生

1年前期で履修する「基礎力総合ゼミナール」は、少人数で行う「ゼミ別学習」と、全体で行う「合同学習」があります。ゼミ別学習は、ゼミ毎で学習内容が異なります。私が所属した上村ゼミでは、約9回の講義を2つに分け、前半を「出生前診断」、後半を「再生医療」とし、倫理的問題についてディベート、ディスカッションをしました。その際、学生主体で司会者や書記を決め進行していきます。より説得力のある情報を集め自らの考えを発信することを繰り返すなかで、主体的な学習姿勢が身に付きました。

一方、合同学習では、本学の先生や図書館の方から本学のカリキュラム構成や教育理念、学修のための情報収集の仕方、レポート作成の方法等を学びました。さらにPROGテストを行い、「リテラシー」、「コンピテンシー」力を計りました。このテストを行うことにより、自己の弱点、強みを確認し、向上させるために何が必要なのかPROGの「強化書」を使って自己分析をしました。合同学習の中で、特に印象に残っているのが小林先生の「学習と学修の違い」についての講義です。この講義の後、入学後初のレポート作成の課題が出されました。高校までの受動的な学習方法とは違い、主体的に考え実践する能動的な学習方法が必要だということを実感しました。この基礎力総合ゼミナールで培った自己発信力、積極的な姿勢をさらに発展させ、後期以降の学習、実習に生かしていきたいと考えます。

記: 1年生 西山 萌



Class Introduction

看護過程展開実習を終えて

2
年生

私達2年生は看護過程の展開実習へ行きました。4月から事例を用いて看護過程を展開してきましたが、病棟で出会った実際の患者さんは刻一刻と体調が変化していきます。そのような患者さんの状態を知るには、自分の目で見て、手で触れて、耳で聴くということが大切です。これまで学習した、病気を理解するための知識やフィジカルアセスメントの技術を用いて、この患者さんにはどのような介入が必要なのかということを常に考えながら接することが大事だと実感しました。実習中は、自分の知識や技術に自信が持てず、思うように実習を行うことが出来ずに悔しい思いをしたこともありました。しかし、患者さんから手を握られ、温かい言葉をかけられた時には、患者さんに対して精一杯向き合ってきたことが報われたような気がしました。

今回の実習で看護学生を受け入れてくださったすべての方々に感謝し、実習で得た学びを次回以降の実習とこれからの学校生活に繋げていきたいと思えます。



記: 2年生 柳田 さくら

Class Introduction

演習の学び ～採血のシミュレーターを使った演習～

3
年生

私達3年生は、より実践的なレベルに近づけるようさまざまな演習に取り組んでいます。演習で学ぶ技術の1つ1つは、一連の流れを通して学習しています。例えば採血の演習では使用物品の準備から、患者さんへの声掛けや観察、採血の実施、使用物品の後片付けまで途切れることなく実践します。これにより、臨場感をもって、発展的に学習を深める機会となります。また、学生がお互いに患者役となり、援助や技術を模擬体験することで、患者さんの立場に立った看護技術につながるよう心がけています。

1年生、2年生、3年生で経験するさまざまな看護技術の演習を通して、すべての看護技術は関連し、つながりがあることがわかりました。また、演習で得た技術を積み重ねて繰り返し学ぶことで質は向上するため、日々成長している自分にも気づくことができます。演習の授業は、予習からはじまり、授業後の復習や応用を繰り返すことで習得できる内容であるため、これからも意欲を持って学んでいきたいです。

記: 3年生 高木 唯



Class Introduction

3年次選択科目「国際保健・看護Ⅱ」でベトナム海外研修を行いました。

3
年生

海外
研修

3年生10名は、8月4日から8月11日の8日間、国際保健・看護Ⅱの海外研修でベトナム社会主義共和国を訪問しました。一昨年・昨年に続き3度目となる今回は「災害と看護」というテーマのもと、研修に臨みました。研修初日には、本学の国際交流提携大学であるナムディン看護大学を訪問しました。ベトナム赤十字社講師による災害対策事業の講義を聴講し、その後、日越混合のグループごとに災害準備について話し合い、計画を考えました。これらは研修3日目にマングローブ植林地を訪問した際に、地域に住む方々に発表しました。研修4日目は、ナムディン総合病院を訪問し、ICU病棟と脳外科病棟に分かれて実習をしました。その中で看護技術や病棟の環境、看護師の業務内容など多くの点で日本と異なることを学び、日本の看護や看護師の役割を振り返る機会になりました。5日目には、ナンヴァン村ヘルスセンターを訪問しました。地域住民の健康ニーズをアセスメントしたうえで保健活動を行っていました。最終日には、ベトナム赤十字社を表敬訪問し、積極的に活動する人道機関として、多くの役割を果たしていることを学びました。その後、ベトナム赤十字社が運営するドンアン診療所を訪問し、診療所が通常の診療の他、当該地域の巡回診療を担い、地域住民の健康において重要な役割を果たしていることを学びました。この研修を通して、私達はこれまでの学習態度や看護への取り組み方を振り返り、ひとりひとりが課題を見つけました。今後は、研修で気付いた課題を克服するために、ひとつひとつの学びを着実に積み重ね、看護実践に繋げていきます。

記: 3年生 岩本 実華、大庭 幸子



Class Introduction

最終学年としての夏を迎えて

～国家試験対策講座を受けて～

4
年生

4年生は、8月7日・10日に国家試験対策として東京アカデミー北九州校から講師をお招きし、特別講座を受けました。今回の講座に至るまで、2月に初めて講師の方から国家試験に向けてのご指導を受け、その後それぞれ実習と卒業研究、国家試験の勉強を並行して取り組んできました。

今回は東京アカデミーの問題集を事前に予習し、1日目が人体の構造と機能、2日目に疾病の成り立ちと回復の促進について講座を受けました。講座では、特に皆が勉強しにくいところ、国家試験によく出題されているところを指導していただき、今までの勉強方法を再確認できました。また、講座を通して、解剖生理からその器官や機能が害されることで起こる症状、そのための検査、治療をつなげ、暗記ではなく、それぞれ根拠となるメカニズムを理解することが大切なのだと改めて実感しました。

私自身、多重課題の中で常に時間の使い方や勉強の仕方に迷いながらも、周りの先生方や友人に相談しながら一つ一つ目の前のことに精一杯取り組んでいます。また、高校時代に恩師から「勉強はイベントではなくルーティンだよ」と教えられたことを身にしみて感じています。これまで講義や実習などで養ってきた看護の視点や考え方、看護観だけでなく、さらに基礎知識があることで対象となる患者さんによりよい看護ができるのではないかと考えています。現在、私たちは国家試験の対策に日々取り組んでいますが、看護師になることがゴールではなく、これからも学ぶということを習慣化できるように心がけたいです。

最終学年としての夏を迎えました。「やりたいこと」と「やるべきこと」をうまく切り替えて残された時間を今回の特別講座を有効活用し、全員が国家試験に合格できるよう、また知識をもとに患者さんを見ることができる看護師になれるよう、努力していきたいです。

記: 4年生 金城 麻未



Class Introduction

分娩介助の技術試験を受けました

大
学院

7月29日、大学院1年生助産分野の学生4名は分娩介助の技術試験を受けました。

分娩介助技術は、助産実習を行うために必須のもので直接介助者、間接介助者、産婦役、評価者に分かれ、約20分間で一連の介助技術125項目を実施していきます。直接介助者と間接介助者2人のチームワークが強く求められ、スムーズかつ安全なお産に誘導していくためにも、直接介助者の介助技術はもちろんですが、間接介助者の妊婦に対する声掛けや先を見越した物品準備など2人の息の合った行動が重要であると感じました。

また、今回の試験によって各自の課題が明確となり、先生方からもご指摘いただいた清潔不潔が曖昧となっていたことを強く痛感することとなりました。

今回いただいた助言を活かして、来年1月からの助産基礎実習では、実際の産婦さんに援助できるようさらなる技術の向上と知識の獲得に向けて日々勉学に励んでいきたいと思えます。



記: 大学院1年生 江藤 沙月

卒業生・修了生紹介



白石 真那さん

2010年 看護学部卒業
国立病院機構 九州医療センター NICU 看護師

Mana
Shiraishi

私は大学卒業後、国立研究開発法人成育医療研究センターのNICUで看護師として勤務し、本年度より地元福岡に戻り、九州医療センターNICUに看護師として勤務しています。NICUでは低出生体重児や先天性疾患をもつ新生児が入院しています。急性期の看護だけでなく、育児指導などの退院支援も行っています。新生児は言語的な訴えはありませんが、様々なサインを出してくれます。そのサインを感じ、看護を行っていくため、とてもやりがいのある現場であり、大学で学んだ看護の基本が活かされていると感じています。入院中から退院後の児の成長とご家族を支えることができるよう、退院支援や在宅支援を視野に入れて、新生児看護についてこれからも学びを深めていきたいと考えています。



田中 時穂さん

2014年 大学院看護学研究科修了
現在 日本赤十字九州国際看護大学助手

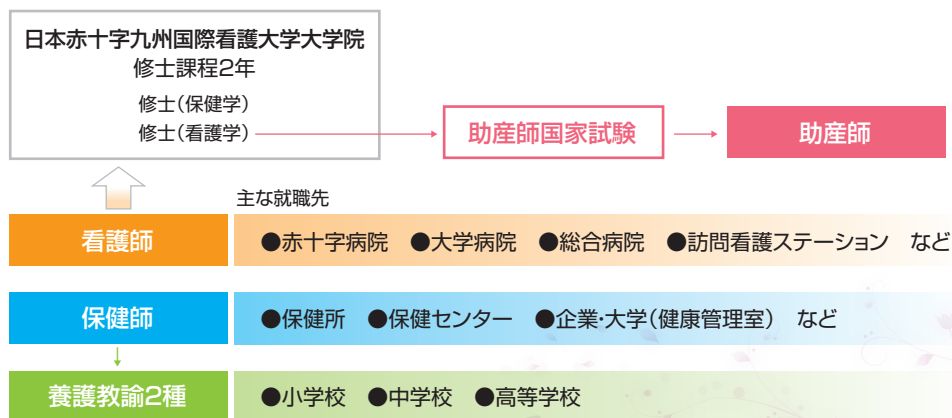
Shiho
Tanaka

私は助産師教育が大学院で行われるようになったこと、看護研究をしっかりと学びたいという思いから、日本赤十字九州国際看護大学大学院へ進学しました。本学では金曜日・土曜日に授業が開講されているので、助産師として臨床で働きながら、交代勤務の合間を縫って授業を受けることができました。

大学院ではこれまで働きながら抱えてきた、助産学実習での臨床指導についての疑問をテーマとして研究を行いました。自分が抱く疑問をどのようにテーマとして設定し、研究を進めていくのか、担当の先生方の助言を得ながら一連のプロセスを学ぶことができました。

これまでの臨床での経験や大学院での学びを学生に伝えたいと思い、現在は本学に勤務しております。

本学卒業後のキャリアプラン



保健師の資格を取得すると、申請により第1種衛生管理者、さらに教育職員免許法で定められた科目を履修していれば、養護教諭2種の免許も取得可能です。

日本赤十字社宮城県支部ボランティア活動に参加して

日本赤十字社宮城県支部が多賀城市にある、仮設住宅において住民同士の交流を活性化することを目的としている心のケア活動に14名が参加しました。1年生前期の科目である赤十字活動で日赤宮城県支部を訪れたことがきっかけで心のケア活動を知り、春休みを利用し赤十字の看護大学に通う大学生として出来ることを考え、住民の方との交流を目指して、本学のエイサーサークル「ゆいまーるのわ」によるエイサー(沖縄の伝統的な踊り)披露や手踊り講座の開催、桜の壁画の制作を行いました。住民の皆さんが笑顔で手踊りを踊ってくださった事がとても印象に残っています。宮城県支部の方からも「久しぶりにこんなに笑顔の皆さんをみました。」という感想をいただき、活動終了後は小学生と一緒に遊ぶこともでき、被災地の今をみる事ができた1日となりました。



沖縄エイサーサークル「ゆいまーるのわ」活動紹介

私たち沖縄エイサーサークル「ゆいまーるのわ」は、現在1年生から4年生まで43人で活動しており宗像市を中心に地域のお祭りや老人ホーム、病院、小学校などで沖縄の伝統的な踊りであるエイサーを披露したり、手踊り講座を開き地域の方々と一緒に踊ったりしています。最近では、福岡市や北九州市など活動の場を広げ、年間およそ40件以上の依頼をいただいています。

ゆいまーるのわは、14年前に先輩方が創設された伝統のあるサークルです。現在40件以上の依頼を地域から頂けているのは、代々先輩方が地域の方々と交流を大切にされてきたからだと思います。踊りに行くと、「今日はよろしくね。楽しみにしているよ。」と声をかけていただいたり、小学生たちからも「お姉ちゃんたち知ってるよ。」と声をかけてもらえたりと、地域の皆さんに覚えていただけてとても嬉しい気持ちでいっぱいです。特に、ゆいまーるのわに入ってよかったなと思うことは、私たちの踊りを見て涙を流しながら「感動しました、ありがとう。」と地域の方が手を握って下さるときです。サークル名でもある“ゆいまーる”は沖縄の言葉で“助け合い”という意味があります。私たちはこれからも、この助け合いの「わ」を地域の方々と広げていながら、積極的に交流を深めていきたいと思っておりますので今後も「ゆいまーるのわ」をよろしくお願いいたします。



日本赤十字六看護大学学生交流会に参加しました。

8月10日、11日に日本赤十字豊田看護大学で行われた、日本赤十字六看護大学学生交流会に本学より3年生2名、2年生4名で参加しました。この交流会は、毎年、北海道・秋田・東京・愛知・広島・福岡の赤十字看護大学の学生が集まり、ディスカッションなどを通して交流を深めるものです。今年6年目を迎えた交流会は、「赤十字の歴史と災害救護」をテーマにして豊田で開催されました。

1日目は、大学紹介やアイスブレイキングを行った後、日本赤十字豊田看護大学のサークルである「DMAC(防災サークル)」によるHUG(避難所運営ゲーム)を行い、もし自分が避難所の運営をしなくてはならなくなったら、避難してくる人々や出来事にどのように初期対応すればいいのか事例に基づいて考えました。避難してくる人々の対応をしたり、救援物資が届いたり、トイレや駐車場の準備をしたりなど、様々なことが同時に起こり、全体を見ながら、全てに対応するのは非常に難しく、メンバーそれぞれが役割を持ち、お互いに声をかけ合い、協力することが重要だと感じました。また、このゲームを通して、被災地で手当てを行うということは、単に医療活動を行うだけではないということを感じることができました。その後、今回のゲームの中で困ったことについて、どのように対応すればもっと良い運営ができたのかについて振り返りを行い、他のグループの様々な考え方に触れることができました。

2日目は愛知県犬山市明治村へ訪問し、赤十字の歴史について学びました。今回この交流会に参加し、各赤十字看護大学の学生と様々な交流をすることが出来ました。また看護職を目指す仲間たちから多くの刺激を受け、もっと積極的に他の学生と交流し、多くの考え方に触れていきたいと思いました。



「がんばれ共和国阿蘇ぼう!キャンプ」でボランティア活動をしました。

8月21日から行なわれた、難病の子ども支援全国ネットワーク「がんばれ共和国 阿蘇ぼう!キャンプ」に本大学から32名がボランティアとして参加させていただきました。今回のキャンプに参加した家族は過去最多の32家族、ボランティアを含めて200名の参加となりました。このキャンプは、難病や病気、障がいを抱えた子どもたちとその家族が2泊3日を通して、さまざまなレクリエーションに参加し、他の家族と交流できる場所です。子どもたちや家族は1年に1回開催されるこのキャンプを楽しみにしており、実家に帰ってきたような感覚で楽しんでいました。このキャンプには、医師や看護師も参加しており、子どもたちの「安全と安心」が守られています。このように、安心して任せられる存在がいるからこそ、子どもたちや家族は楽しくキャンプに参加することができるのだと思いました。私たちボランティアは、担当になった子どもたちや家族と食事や入浴を共にし、一緒にレクリエーションに参加することで密度の濃い時間を過ごしました。このような交流は、私たち看護学生にとって、病気の子どもたちの家庭での生活の一部を知る貴重な経験でもありました。2日目の夜に行なわれた「かくし芸大会」では、本大学の学生で「おどるボンボリン」を踊りました。会場にいる子どもたちや家族に手拍子や掛け声を行なってもらい、会場にいた全ての人が1つになれた時間でした。



今回、私は2回目の参加でした。去年お会いした家族と話ができ、また、子どもたちの成長した姿を見ると、とても温かい気持ちになりました。来年もボランティアとして参加し、子どもたちと家族の素敵な笑顔にお会いできることを願っています。

災害トリアージ訓練を オープンキャンパスで実施しました。

訓練は、近隣において大型バスを含む多重衝突事故が発生したことを想定し、学生が傷病者のトリアージおよび患者搬送、救護所における医療活動を行いました。訓練には、認定課程の研修生を含む関係者約50人が参加し、特殊メイクを施した学生ボランティアが傷病者役を演じるなど、緊張感のある中で行われました。

災害発生現場には、傷病者集積所を設置し、約30名の傷病者トリアージを実施したほか、応急救護所における医療活動を行い、緊急性の高い傷病者が、優先的に処置が行われるよう並び替えのトリアージまで実施する実践訓練を行いました。

本訓練は、赤十字の国内外における災害救護をはじめ、苦しむ人を救うための幅広い活動を念頭に、また、地域との連携を強化する目的で行われました。本学が災害時において傷病者の搬送・受入をいかにスムーズに行うかを主眼に実施しており、今後も訓練を継続して行うことで、災害対応力の強化を図っていきます。

大型バスを含む多重衝突事故が発生し、 多数の傷病者発生 トリアージ^{*}を行います

※災害・事故現場などで一時に大勢の負傷者が発生した時に、緊急度によって治療の順番を決めること



緊急度(軽症→中等症→重症)の順にトリアージタグの色は(緑色→黄色→赤色)です。今回はタグの色に合わせてシートも用意して救護に備えました。



黄色や赤色のトリアージタグをつけた傷病者は自力歩行ができません。必要に応じてその場で救護員が応急手当を行い担架で応急救護所に搬送します。



トリアージ訓練に参加して

私は、今回のオープンキャンパスでのトリアージ災害訓練でトリアージを行う看護師役として参加しました。事前のオリエンテーションでは、トリアージで使用されるSTART法について学び、担当の先生から指導を受けながら、学生間で練習を行いました。訓練本番では、救急看護認定看護師課程研修中の看護師さんと二人一組になりトリアージを行いました。しかし、実際の場面になると、傷病者役の叫ぶ声や緊迫した場面に頭が真っ白になり、練習通りにはいきませんでした。ペアの方からアドバイスをいただきながら、なんとかトリアージを進めていくことができました。2次トリアージに関しても指導のもとに観察や記録を実践し、とても勉強になりました。初めての経験で戸惑うこともありましたが、練習をしていたからこそできた部分もあり、平時から訓練を重ねていくことで、実際の場面でも生きてくるのではないかと感じました。また、学内ではかかわることの少ない認定課程研修生の方のお話も聞くことができ、学ぶことも多くとても良い経験ができました。

記:4年生 森 ふみ

応急救護所には医療資機材や医薬品セットを整備しています。限られた資材の中で、医療救護活動を行う必要があります。



トリアージ訓練指導者(救急看護認定看護師課程専任教員)
小池伸享先生、清末定美先生

DMAT(災害派遣医療チーム)、JDR(国際派遣救援隊)として、災害発生時の第一線で活動されている専門家の指導のもと実施しました。

ベトナム ナムディン看護大学講師Tuong Thi Hue (フエさん) が大学院研究科の研究生として来学しました!

今年5月から3か月間、本学国際交流協定校のナムディン看護大学から研究生としてフエさんが来られました。フエさんは、2年前に大阪で日本語学校に通い、日本語能力試験2級を取得しています。彼女の研究目的は、質の高い講義・演習授業計画案を作成し、日本の科学的根拠に基づいた授業構築の方法について実践的に学ぶことです。

研究成果報告は、流暢な日本語で、自身の学びと成果を発表されました。ナムディン看護大学で実施する授業案、演習や実習で学んだベトナムには無い高齢者医療制度と在宅看護、教育制度にも触れ、帰国後に日本の医療・介護保険制度を参考に、施設的环境・設備や看護の工夫点を今後の教育活動に生かしていきたいことを述べられました。

留学を決めた時は周囲の反対が強く一度は諦めかけたということでしたが、今は留学して学んだ事は「自分の役に立つ!」と、自信を持って答えられると笑顔で語ってくれました。「帰国後も引き続きしっかりと勉強する」という言葉に本学の学生も刺激を受けたと思います。

また、帰国後は、本学学部3年生の「国際保健・看護Ⅱ」海外研修において、ナムディン看護大学および実習施設での研修調整、そして現地学生や教員との交流の懸け橋として活躍してくれました。



福岡
FUKUOKA

嘉麻赤十字病院
看護部長 **梅崎 淳子**

嘉麻赤十字病院は、「人道・博愛・奉仕の赤十字精神に則り、地域に密着した温もりのある質の高い医療の実践に努めます」を理念として、嘉麻市の公的病院としての役割を担っています。訪問看護ステーション、訪問リハビリテーション、デイケアセンター、ケアプランセンターを併設している強みを活かして、在宅療養支援病院として地域住民の方が住み慣れた地域で、できるだけ長く生活できるように、24時間体制で医療と看護が提供できる体制づくりに力を注いでいます。

そのため、看護師は、入院時から多職種と協働して退院支援を行っています。受け持ち看護師として患者さんの生き方や生活を理解し、生活に軸足を置いた主体的な関わりが求められます。

学生時代は、失敗を恐れずに様々なことにチャレンジをしてください。経験に勝る学びはないので、4年間を有意義に過ごされることを願っています。

嘉麻市は高齢化の進んだ地域ですが、豊かな自然に囲まれ、時間の流れも穏やかで、人と人の絆が感じられるところです。ここをリフレッシュしたい時においでください。



看護部長からのメッセージ

M E S S A G E

わたしたちと一緒に
赤十字の未来をつくりましょう



福岡
FUKUOKA

今津赤十字病院
看護部長 **宮崎 久仁子**

今津赤十字病院は、1987年に結核病院から老年病センターへ転換し、地域医療・全人的医療・医療と福祉の架け橋を基本方針として高齢者を対象とした医療を提供しています。また、2025年に向けて地域包括ケアシステムの一翼を担うべく病床機能を変化させながら、時代に適応した病院づくりをしています。

看護部は、看護師104名介護福祉士10名看護助手22名の人員で、180床の患者様の看護を実践しています。「高齢者の尊厳を尊重し、その方の独自性を見だし創造性を持って看護を展開する。日常の些細なことも患者様に寄り添って継続的に実施する。」をモットーに楽しみながら看護を行っています。患者様に喜ばれるプラスアルファの看護を実践することが赤十字看護師の勤めだと考えています。100%の看護を実施してもそれは当たり前のことで、120~130%のケアを提供して初めて満足感が得られるのです。プラスアルファの看護をするためには、看護師一人ひとりの意気込み・意欲が必要です。どうか是非学生の間に何事にも意欲的に取り組みチャレンジしていく心を育てて頂きたいと思います。



平成26年度 進路状況 (卒業生103名 看護師95人/進学8名)

平成26年度 決算報告 (平成26年4月1日～平成27年3月31日)

【消費収入の部】

(単位:円)

科目	予算	決算	差異	備考
学生生徒等納付金	727,550,000	718,925,000	8,625,000	学生授業料他
手数料	16,569,000	11,766,690	4,802,310	入学検定料他
寄付金	8,496,000	4,583,569	3,912,431	寄贈図書他
補助金	102,320,000	122,247,920	▲ 19,927,920	経常費補助金他
資産運用収入	15,600,000	11,230,941	4,369,059	受取利息
事業収入	29,850,000	29,215,502	634,498	認定看護師養成教育事業収入他
雑収入	7,278,000	6,552,372	725,628	科研費補助金間接経費他
内部取引	2,448,000	7,613,309	▲ 5,165,309	
帰属収入合計	910,111,000	912,135,303	▲ 2,024,303	
基本金組入額合計	▲ 108,629,000	▲ 100,000,000	▲ 8,629,000	
消費収入の部合計	801,482,000	812,135,303	▲ 10,653,303	

【消費支出の部】

(単位:円)

科目	予算	決算	差異	備考
人件費	565,189,000	551,588,033	13,600,967	教職員人件費
教育研究経費	324,138,000	324,580,067	▲ 442,067	教育経費
管理経費	38,021,000	37,436,937	584,063	管理経費
資産処分差額	0	618,821	▲ 618,821	教育研究用備品他の処分差額
内部取引	13,641,000	15,838,588	▲ 2,197,588	
消費支出の部合計	940,989,000	930,062,446	10,926,554	
当年度消費支出超過額	▲ 139,507,000	▲ 117,927,143		
前年度繰越消費収入超過額	496,403,000	508,537,320		
基本金取崩額	0	18,403,056		
翌年度繰越消費収入超過額	356,896,000	409,013,233		

研究室 訪問

こんにちは、メンタルヘルス領域の高橋です。学部では「ケアとコミュニケーション」「学校保健」「精神保健・看護Ⅰ」「精神保健・看護Ⅱ」「精神・地域看護実習」等の科目を担当しています。精神科看護というと、血液診断や画像診断で客観的評価を得ることが難しいため、わかりにくい領域だとも思うところもあるかもしれませんが、私は、学生の頃、精神看護実習を通して、精神疾患を有するひとへのコミュニケーションや生活支援が、相手に与える影響の大きさに驚き、専門性を高めてみたいと思いました。それが、現在、行っている精神障害者の摂食嚥下機能支援やうつ病家族へのコミュニケーション技術教育といった研究・教育活動につながっています。

自分の専門性を生かし、社会に貢献したい領域を見つけることは容易な道のりではありません。私の場合、自分の関心事を発見した最初の場は看護学実習でした。学生時代の学びや気づきは、専門家としての自分に多くの示唆を与えてくれるので、学生や卒業生の皆さんと精神看護について話し合う機会があればとてもうれしいです。精神看護学に関心がある方は是非、私の研究室に遊びに来てください。

メンタルヘルス領域 教授
高橋 清美 先生



ランチオンミーティング 開催状況

	月日	テーマ
第1回	4月13日	心の豊かな国ベトナム —国際保健・看護IIの研修を終えて— (講師) 本学学部4年生
第2回	5月18日	被災地のいま ～地区踏査とボランティア活動から考える～ (講師) 本学学部2年生
第3回	6月 8日	アイルランド大学短期留学報告 インドネシアで出会った看護 (講師) 本学学部4年生
第4回	6月29日	フィリピン中部台風復興支援事業 活動報告 (講師) 本学助手 時枝 夏子
第5回	7月17日	ベトナム留学生フエさん 研修成果発表会 (講師) ナムティン看護大学 トゥオン・ティ・フエ 氏



7月19日 西日本新聞
ふくおかで学ぼう!
時代が求める看護の専門職を育成



大学を囲む、宗像の海・山・空をイメージし、水と空が一続きになっ
て一様に青々としていることを表す四字熟語「水天一碧」から名
付けられました。

「碧」は、同窓会「遥碧会」の字のひとつでもあり、本紙を通じて、
学生・保護者・OG・OBの皆様と大学とが一続きにつながって欲
しいとの願いが込められています。

題字：卒業生 吉田 歩さん／福岡県・柏陵高校出身

日本赤十字九州国際看護大学

Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing & Graduate School

発行：日本赤十字九州国際看護大学 広報委員会

〒811-4157 福岡県宗像市アスティ1丁目1番地
Tel.0940-35-7001 Fax.0940-35-7021

<http://www.jrckicn.ac.jp/>

寄付のお願い

本学では、個人・法人の方からのご寄付を募集して
います。寄付金には、一定の税制上の優遇措置が受
けられます。詳しくは、本学ホームページでご確認を
お願いいたします。